

# Communication Skills における LL 授業評価

## — 学生のアンケートによる —

アンドラディク美

### I. はじめに

1930年代に今日のLL (Language Laboratory) の直接の原型がオハイオ州立大学で使用され始めて以来、LLは英語教育、特に、聴解訓練の場で重要な役割を果たしてきた (Johnson and Johnson, 1998)。1970年代のビデオ・モニターのLLへの導入を経て、90年代半ばにはCALL (Computer Assisted Language Laboratory) への移行期に入り、授業形態、教材ソフトにも変化が起きている。しかし、CALLを導入しても操作性、教材の面などから、満足できる授業が直ちに出来るとも限らず、結局、CALLに組み込まれている従来のLL装置のみを使用しているケースもあると聞く。本学でも近い将来CALL導入を検討するようになるであろうが、その前にまず、現在筆者が担当している従来のスタイルでのLLの授業の分析・評価を学生へのアンケートを基に試み、将来の展開に備えたいと本リサーチを行った。

小池、他が1985年に日本人大学生1万余人を対象に実施した大学英語教育に関するアンケート調査によると、48.6%の学生が「授業がつまらない」とし、その理由の筆頭に「習いたいことが習えない」(38.6%)を挙げ、特に授業での「聞く・話す」の習得に満足していると回答した学生は3割に満たない(小池、1996)。宮原、他が1997年に日本、韓国、中国3カ国の大学生1781名を対象に実施した英語学習実態調査でも、日本人学生(n=751)の52.8%が大学英語は「期待と異なる」と答え、英語・英文学科の学生(n=169)に至ってはそれが63.3%となっている。失望理由には英語専攻の学生の59.1%が「聴く・話す技能が訓練されない」ことを挙げ、「教材に興味を感じない」がそれに続く(宮原、他、

1997)。

本リサーチでは、これら先行調査を念頭にアンケート調査を実施し、個々の学生による評価を、授業改善のためのフィードバック情報として活用していくことを図る。本稿では先ず、対象となる LL 授業である Communication Skills のコース概要と調査に用いたアンケートの概要について述べ、次にアンケートの結果を考察し、最後に今後の課題について述べることにする。なお、本稿はアンケート結果の詳細を掲載したため、頁数は多くなったが、Evaluation Report としてまとめた。

## II. コース概要

### 1. 授業形態

2 年生の必修英語専門科目である Communication Skills は通年履修、週 2 回、各 90 分、1 クラス約 50 名で、英語力レベル別のクラス分けはされていない。この一回 90 分の授業は二分され、学生はネイティブ・スピーカーによる普通教室での授業（クラスと呼び、2 名の教員がそれぞれ半数を担当）と、日本人教員による LL 教室での授業（LL と呼ぶ）双方に各 45 分間づつ出席する。前者では、主にスピーチ、ディスカッション等スピーキング・スキルを、後者ではリスニング・スキルを学ぶ。なお、本リサーチの対象は LL 教室での授業のみに限定している。

### 2. レッスン構成

リスニング力養成を主な目的にする LL 授業（45 分）は、最初にウォーム・アップも兼ねて口頭文型ドリルを行い、次に所要時間と難易度によって選択したテープ教材によるリスニング、最後にビデオ教材によるリスニングという構成（表 1）になっている。教材の所要時間によってはテープ或いはビデオ教材何れかのみ用いることもある。

### 3. 使用教材

#### a. 口頭ドリル練習用教材

口頭ドリル（pattern practice）に使用している文型は、1）日常会話で使用される頻度が高いこと 2）日本人学習者が間違い易い文型である

こと 3) ネイティブ・スピーカーによるクラスでのディスカッションの際に役立つこと、を基準に Communication Skills 担当のネイティブ・スピーカーによって以下のテキストより選出されている。

*Modern English Cycle One Books 6 - 10* (Seido)

*MMC: Developing Communicative Competence in ESL* (University of Pittsburgh Press)

*American Kernel Lesson: Advanced* (Longman)

#### **b. リスニング用テープ教材**

リスニング教材のテープ・ソースは主に市販の教材を使用しているが、4月には難易度の低い教材から始めて、徐々に難易度を上げている。各種タスクは、主にテープ・ソースを基に難易度、所要時間等を考慮して筆者が作成したものをを用いている。教材のタイトル、所要時間、タスク等の詳細は、学生に配布している“Listening Comprehension Practice 教材リスト”（資料 1）を参照されたい。リスト中の #1～#14 は教材の導入順であると同時におおよその難易度順も示し、数字が大きくなるに連れ、難易度が高くなる。なお、学生に配布しているリストでは Source 部分は省略されている。

#### **c. リスニング用ビデオ教材**

ESL 用に作成された下記のドラマ (70 分) 1 本を準拠ワーク・ブックを用いながら、前期を通して 15 回に分けて視聴している。

*Living in Washington* (Longman)

### **Ⅲ. アンケート概要**

#### **1. 構成**

アンケート（資料 2）は 6 つのパート（Ⅰ～Ⅵ）全 30 項目から成るが、このリサーチでは主にパートⅠ、パートⅡ、パートⅢの結果を考察した。パートⅠでは各アクティビティの導入順、分量、時間配分など全体的な授業構成について質問し、パートⅡでは口頭文型ドリル、リスニング教材（テープ及びビデオ）、教授方法等具体的に質問した。ドリルに関

しては、教材の説明、提示法、分量（A- 1～A- 3）、練習の形態、時間（A- 4, 5）授業外学習（A- 6）、クラス授業とLL 授業のコーディネーション（A- 7）、学習効果（A- 8～11）の11項目について、リスニング用テープ教材については、興味度（B- 1）、難易度（B- 2）、各種タスク（B- 3）、授業外学習（B- 4, 5）、全教材の理解度、興味度（B- 6）の6項目、ビデオ教材については、理解度（C- 1）、興味度（C- 2）、自習状況（C- 3）、後輩にも薦めたい教材であるか否か（C- 4）の4項目、計10項目について質問した。パートⅢでは、授業全体に関して、英語力向上に特に効果的だった教材（A）、やる気を起こさせた教材（B）、今後取り上げて欲しい教材（C）、自習状況（D）、教師の使用言語（E）、習得度（F）の6項目について尋ねた。パートⅣ、Ⅴは参考として、TOEIC等各種試験の受験歴、海外居住・留学経験を問い、パートⅥでは授業等に関しての意見、感想などを自由に書かせる記述式とした。なお、本稿では参考までに記述式回答結果の数項目のみを表として（表2～7）、末尾に添付してある。

## 2. 実施方法

前期末の最終授業日（2000年7月）にCommunication Skillsを履修している本学の2年生279名を対象に、アンケート調査を実施した。その際、記名方式ではあるが、結果は授業のフィードバック情報としてのみに活用し、学生個人の成績には全く影響しないことを伝えた。

## 3. 集計結果のレベル分け

前述の通り、この科目は英語力によるクラスのレベル分けはなされていないが、本リサーチでは出来る限り詳細に学習状況を把握するために、便宜上、上位、中位、下位の3グループに分けた。グループは前期開始時の4月に実施したTOEIC Practice Test (Stupak, 1995) のリスニング・パート及び7月の前期末試験の成績により、上位、中位、下位各50名を抽出し、計150名分を集計・分析した。なお、2年以上の海外居住経験者、及び無回答の箇所（パートⅡ B- 6, 7は非考慮）があったアンケートは除外した。

## IV. 結果と考察

### 1. レッスン全体の構成

初めに、授業全体の構成に対する学生の満足度を調べるため、教材の導入順、分量、配分等を五段階評価で、また、良かった点、改善すべき点を自由記述式で尋ねた。

全体のレッスン構成に関しては、「とても満足」と「満足」を併せると全体で 62.6% の学生が現状に満足していると回答しており、その理由としては「毎授業の手順が大体決まっているのでテープなどの準備もし易い」、「色々な種類のリスニングが少しづつ出来てよい」などが挙げられている。4.7% の学生が「やや不満足」としているが、「各教材にかかる時間が短く中途半端になってしまう」ことや、「色々なことを次々とするのでせわしく、常に時間に追われている」ことをその理由に挙げ、「文型ドリルは自宅学習にして、もっとビデオ教材を増やして欲しい」という意見も出ている。

上位群に限ると、「とても満足」と「満足」が、合わせて 76.0% になり、45 分間の授業中にできるだけ多種多様な教材をこなすという授業スタイルが受け入れられているようであるが、中、下位群では共に 56.0% に留まっている。これは多くの教材を次々に提示したため、ゆっくり消化吸収する余裕がないことも一因であると推測できるので、各教材の所要時間とアクティビティ間の間合いを考慮し、学生がゆとりを持って授業に参加できるような構成を考える必要がある。

### 2. 教材

このセクションでは、A.ドリル、B.リスニング（テープ）、C.リスニング（ビデオ）それぞれの教材について、通常の授業を通してだけでは把握しきれない学生からのフィードバックを得ることを意図した。

#### A. ドリル

本コースで取り入れているドリル（pattern practice）は、音声や構造の形式を重視する、Oral Approach（Situational Language Teaching）

に基づいているが、60年代に全盛だったこのアプローチは、機械的な置き換え練習が実際のコミュニケーション活動には繋がらない、学習者の動機付けや興味の喚起に対する配慮が欠落している（佐野富士子、1995）等、批判が多く、現在ではあまり使われていない。しかし、取り入れ方しだいでは、学生が実際のコミュニケーションに必要な基本文型のストックを増やすことや、モデル・スピーチを聴く事でリスニング力をつけ、自然な音声を身につけることも可能であるので、本コースでは授業の初めの10分程度をこの時間に充てている。

なお、今回のアンケートでは、文型の説明、提示方法、分量、練習時間、練習方法、さらに個々の学生の主観的習熟度等、教材の扱い方を尋ね、コンテンツ（文型）には言及していない。

#### A-1 文型の説明

教師による文型説明は理解しやすかったか、という問いに対して、「大変理解しやすい」と「理解しやすい」の回答合計は全体でみると、67.3%であるが、上位群の合計が78.0%であるのに対し、下位群では60.0%と差がある。現在、教師による文型の説明は主に英語で行い、日本語での説明は要点の再確認に留めているので、下位群の「理解」が低い一因はこの英語中心の説明にあるとも考えられる。

#### A-2 文型の提示法

毎授業での文型の提示法については、8割強の学生が「併用」を最も効果的としたが、これは最初にモニターで2、3の例文を表示、説明した後、テキストを読まずに全文の口頭練習を一度行い、その後で、必要に応じて各自のテキストで文型の再確認をしながら再度口頭練習をするという、現在行われているスタイルである。

#### A-3 分量

現在、一回の授業で2ないし3の基本構文と、それぞれに10前後の練習文、合計20～30文の口頭ドリル練習を、原則として2回づつ繰り返しているが、8割強がこれを支持しており、特に、下位群にのみ負担になっているような結果も出なかった。

#### A-4 練習時間

全体の7割弱は現在のLL授業時間中における練習時間を「適当」としているが、3割弱は「少な過ぎる」としているので、授業中の練習時間を若干増やし、同時に学生には時間外の自主的練習量を増やすよう促す必要がある。

#### A-5 ペア練習

今年度から口頭練習方法のヴァリエーションとして積極的に取り入れ始めたペア学習（教師のコンソール操作によりアトラダムにペアを組む）は、クラス全員がリラックスした雰囲気の中でやり取りができるので、繰り返しの練習があまり負担にならず、相手の学習状況も参考になる（杉本、2000）とされており、LLシステムを使用したクラスではポピュラーな学習方法の一つである。しかし、アンケートでは、「あまり良くなかった」、「良くなかった」の合計が20.0%と、予想以上に否定的な評価が多く、理由には「日本語を使ってしまうので効果的でない」、「相手の顔が見えないのでやりにくい」、「間違えないようにと、テキストをただ読んでしまう」などが挙げられている。肯定的な意見は「普段話すことのない人と話せて良い」くらいであった。現在、ペア学習はドリルに限っているためか、学生には他のクラスメートのペースに合わせることなく、自分1人だけで文型習得に専心したいという意識が強いようで、この練習方法は筆者の期待した程、受け入れられなかったようである。

#### A-6 自宅学習

授業時間以外の自発的練習について尋ねたが、「かなりした」、「ある程度した」に「少しはした」を加えると8割強の学生が授業時間以外にも練習をしており、授業時間内の各文2度ずつの練習だけでは十分でないことを学生自身が自覚しているようである。上位群の16.0%が「かなりした」のに比べ、下位群ではそれが4.0%と極端に少ないが、「ある程度した」と「少しはした」を合わせた数字では、上位群62.0%、中位群70.0%、下位群80.0%となり、下位群の努力振りがわかる。

#### A-7 クラス授業とLL 授業間のコーディネーション

現在、ドリルは先ずLLにおける口頭反復練習とその後の自宅学習によって文型を把握し、fluencyをつけてから、その応用をクラス（ネイティブ・スピーカー教員による授業）で行う、という手順を取っており、学生にもその趣旨は伝えてある。この方法が学生にとっても効果的であることを再確認することを意図しての設問だったが、半数弱が、逆に、クラスで先に練習した方が良いと答える、予期せぬ結果が出た。今回は理由を問わなかったので、この項目については今後の課題とする。

#### A-8 習得度 - 文型

学習した文型について、各学生の主観的習得状況を尋ねたが、「かなりできた」と「ある程度はできた」をあわせた結果は3群平均では38%、上、中、下位各群ではそれぞれ、48%、34%、32%となり、文型習得度は上位群でより大きいことがわかる。

#### A-9 習得度 - Fluency

Fluencyが「かなり増した」の回答は上位、下位群、それぞれ14.0%、4.0%と大きな差がみられるが、「かなり増した」と「ある程度増した」を合計すると全ての群で40.0%と全く差がない。ただ、全体の5割弱が文型、fluencyともに「どちらとも言えない」と、学習効果はさほどでなかったと自己判断している。ただ、リピートをすることによってリスニング力をつけるのに効果的とされる“a rapid colloquial style with sound changes”（Nakamura, 2000）であるテープ・モデルを使用しているので、リスニング力自体はある程度伸びていると考えたい。

#### A-10 応用力—1

学習した文型を会話、ライティングなどCommunication Skills以外の授業で実際にどのくらい使っているかについて調べたこの問いでは、「かなり使っている」「まあまあ使っている」を合わせて36.7%、それに「少しは使っている」を加えると7割弱の学生が習得した文型を他の授業でも使っている様子が窺えるが、下位群では46.0%の学生が、「全く」、或いは、「ほとんど」使っていない。これは他の授業で使える程の



習熟度に達していないのか、使う意欲があまりないのか、或いは英語を使う機会のある英語専門科目をあまり履修していないからであろうか。

#### A- 11 応用力ー2

A- 10 の問いで、学習した文型を他の授業でも「かなり使っている」と答えた学生は6.7%と僅かなのに比べ、学習した文型を将来実際のコミュニケーションで使えそうだと思うかと尋ねたこの問いでは、67.4%の学生が、習得した文型を「かなり」或いは「ある程度」使えそうと判断し、「全然使えない」は0%で、「あまり使えそうもない」と答えた者も5.3%だけである。学習した文型の有用性を認識し、現時点ではまだ十分使いこなせないが、将来は使いたいと思っている学生が多くおり、これが熱心な授業参加の動機の一つになっているとも考えられる。どちらとも言えない」の率は下位群になるにつれて上がるが、これは習熟度に対する自信のなさや、将来英語を使う可能性を現時点ではあまり考えていないことなどによるのであろうか。

#### A- 12 まとめ

ドリルに関しては、文型の提示、説明方法、及び文型数、練習量は、概ね適切との評価を得たが、ペア学習、及びクラス、LLどちらで先に文型の練習した方がより効果的か、という練習方法については評価が分かれた。また、学習効果を問う習熟度、応用力など学生個人の学習状況に直結する項目に関しては、上位群では自己評価が高いが、中、下位群へと、順次低くなり、全員が同じ教材、指導法で、授業を受けることによる弊害が出ているのでは、と懸念している。

#### B. リスニング (テープ) 教材

リスニング力養成のための教材選定には、学習者の教材への興味、適切な難易度が重要な要素として挙げられるが (Nunan, 1989)、このinputの「質」と共にどれだけたくさんの英語に触れたかという「量」も重要である。大量の英語を聴くことによって始めて、top down方式のリスニングができるようになる (柳, 1999; 小池, 1996)。なお、リスニングの最終目標としては「英語を母国語とする話者の自然な音声英語を理解

する能力」(竹蓋、1984)が一般に挙げられるが、本コースでは第二言語によるコミュニケーションの手段として世界中で使われている、英語が非母国語である話者の英語も積極的に取り入れている。これは1,2種類のアクセントしか聞いた事がない学習者に比べ、種々の異なるアクセントを理解する練習を積んできた学習者の方が、他の新たなタイプのアクセントに出会った際の理解力に優れる(Ur, 1984)とされる上、将来学生達が遭遇するであろう多種多様な英語に対して、心理的抵抗感なしに対応できるようになることを願ってのことでもある。

このセクションでは先ず、教材に対する学生の興味と難易度、そして、スクリプトを利用した復習など、学生がどの程度 input に対して授業外でもフォローをしているか調べた。

なお、「特に興味を持てた教材」及び「特に興味を持てなかった教材」は、回答の多かった上位5位までを、「特に難しかった教材」及び「特に易しかった教材」は、回答が集中した為、上位3位までを記した。

#### B-1 教材に対する興味(集計結果一表2、3)

米企業で実際に使われている顧客への録音メッセージなど、一連の Telephoning 教材に学生の興味が最も集中したが、その理由には実践的なこと、本物であること等が挙げられている。アメリカのTV CMにも「アメリカの生活が味わえて面白い」、と興味が集まった。3番目に挙げられた First Impression は英語母国語話者以外の人々も含めたインタビューであるが、これら上位3教材の共通項は authentic なことである。反面、就職試験面接がテーマなので学生の興味がひくと思われた Sao Paulo Opening が、興味が持てないとされたのは、学生が指摘した通り、いかにも「演じている」という、本物からは程遠いテープ教材の質が一因になっている。お国訛りの英語の発音がトピックの Understanding Accents と、イギリス人夫妻の日常生活の側面を描いた Plan the Meals は話題、ストーリー自体に興味を持ったようである。一方、興味を持てなかったとされた上位2教材は共に難し過ぎて理解できなかったこと、5位の Art は簡単過ぎることが理由にあげられており、適切な

難易度が学生に興味を持たせる要素の一つであることがわかる。但し、ネイティブ・スピーカー向けの Telephoning の一部と TV CM は難易度が高いにも拘わらず高支持を得たが、これには 1 つが 30 ～ 60 秒と短いことと、前述の authenticity が関連していると言えよう。やはり、authentic な教材は、学習者の興味を引く物であるなら、少々難易度が高くても利用する価値がある (Johnson, 1984) と言える。First Impression が、英語が母国語でない人の英語に慣れる必要もある旨を事前に説明したにも拘わらず、訛りがあるからと一部の学生からは敬遠されことは残念である。

## B-2 教材の難易度 (集計結果—表 4, 5)

リスニング教材の選定にあたって重要な要素の一つである難易度であるが、特に、徐々に難易度を挙げた教材を提供することは、学習者のモチベーションを高めることにも繋がる (Anderson and Lynch, 1988)。本コースでは、アンドラディ (1996) の Grading Scale for Listening Materials を参考に、タスクによる調整も加えながら、教材の難易度を次第に上げていくようなプログラムを組んでいる (資料 1) が、ここでは特に難しかった教材と簡単だった教材をその理由と共に問い、予め設定した難易度を学生が同様に受けとめているか否かを調べた。

難しいとされた上位 2 教材は、難易度順がそれぞれ #13, #12 (資料 1 参照、#1 ～ 14 へと徐々に難易度が上がる) で、筆者が設定した難易度とほぼ合致している。Understanding Accents は、難易度が #4 と比較的簡単ではなかったが、タスクがわかりにくかったため難しいとされた。全般に、スピーチの速度、アクセント、語彙、背景知識、登場人物の数、テープの所要時間、タスク等が難しさの理由として挙げられている。難易度順 #2, #3 の Plan the Meal、及び Art は、学生からも簡単、と評されたが、10 人のインタビューからなる First Impression は素材の難易度が中位であったにも拘わらず、インタビューを 1 人分づつ短く区切って聴かせたため、2 番目に簡単と評されており、教材の長さ、タスク同様、難易度に影響を与えることがわかる。全般的に、筆者が設

定した教材の難易度を学生もほぼ同様に捕らえているようなので、今後  
もこのまま、徐々に難易度を上げながらの教材導入をはかり、学生のモ  
チベーションを高め、達成感も得られるように工夫していきたい。

### B- 3 タスク

タスクモリスニング・コンプリヘンションを左右する重要な要素であるが、本リサーチでは時間的制約上、タスクに関するこの項目の集計分析は除外した。

### B- 4 スクリプト

スクリプトを用いて音と文字の関係を理解させる訓練を繰り返すと、綴り字と大きく異なって聞こえる語句の音声イメージが学習され、authentic な音声心的辞書 (acoustic mental lexicon) が形成され、それが聴解力を高める助けになるとされる (松野、1998)。本コースでは、何度繰り返し聞いても理解できないパートの確認、或いは理解度の再確認のため、復習用自習教材として、全学生にほぼ全てのリスニング教材のテープ・スクリプトを配布しており、学生には常日頃、5、6回以上聞いても不明な箇所は必ずスクリプトで確認するようアドバイスしている。この設問では、学生がそれをどの程度実践しているかを確かめた。「常に」から「たまに」チェックするまでを合計すると、91.3% の学生がスクリプトを活用しており、「大体」から「たまに」に関しては3群に大差はない。しかし、上位群の10% が「常に」利用しているのに比べ、下位群ではそれが0%で、より多くの努力を必要とするはずの学生がそれを怠っているのは残念なことである。一度もチェックしたことが無い学生も8.7% いるが、教材が完全に理解できてその必要が無いということは考えにくい。

### B- 5 授業外学習

授業で扱ったリスニング教材は、その後も繰り返しテープを聴くことを薦めているので、その復習状況を尋ねたが、スクリプトは9割の学生が活用しているのと同様に、テープを聴いている学生も「たまに」まで含めれば9割弱に達する。ただ、「常に」と「大体」と回答した、テープ

を頻繁に聴いている学生は、上位群では 38.0% であるが、中位、下位群ではそれぞれ 22.0%、16.0% となってしまう。スクリプトを使っての復習同様、ここでもより多くテープを聴いて欲しい学生ほど聴いていない。なお、学生に配布したアンケート用紙ではこの設問が読み落とし易い場所に位置したためか、記入漏れが多かったことから、この項目のみ「無回答」の欄を設けた。

#### B- 6 全リスニング・テープ教材の理解度と興味度

この項目に関しては、本稿のスペースの制約上、また前述の B- 1, B- 2 と重複する部分もあるので、集計分析からは除外したが、後日改めて理解度と興味度の相関関係等を分析していく予定である。

#### C. Living in Washington (ビデオ教材) について

半期を通し、ビデオに沿ったワーク・ブックを使用しながら、連続ドラマを見るように毎回の授業で少しずつ視聴したこのビデオ教材は、アメリカの大学に通う、3 人のアメリカ人学生のキャンパス、家庭での生活がストーリー仕立てとなっており、これを視聴する学生があたかも日本語のドラマを見るかのように、英語でストーリーを楽しみながらリスニング力を養成するように作られている。難点はビデオの製作が 1984 年と古いことで、使われている英語、ストーリー自体には問題はないが、ファッションなどから学生達が「古臭い」と拒絶反応を示すことを危惧して、文化的背景など、ストーリーに関連する資料をインター・ネットや Time 誌から適宜に拾い、現在にも十分通用する内容であることを示す工夫を施しながら、授業を行った。現在のところ、学生生活を扱った適当な新しいビデオ教材が他に見当たらず、今後もこの教材を引き続き使用することを考えているので、理解度、興味度と共に、後輩たちにも推薦したい教材であるか否かも質問した。ワークブックの Fill-in-the-blanks などの練習問題は、録音したテープを持ち帰っての宿題とすることが多いので、その状況も尋ねた。なお、この教材に関しては、ワークブックにスクリプトをベースにした練習問題が数多くあることからスクリプトの配布はしていない。

### C- 1 理解度

ストーリーの理解度では、「90%」以上理解できたとする上位群が34.0%であるのに比べ、中、下位群はそれぞれ4.0%、6.0%と極端な差があるが、「70%前後」の理解度では、84.0%、76.0%、60.0%と三群間の差が縮まる。これら「70%前後」の理解度に達した学生はストーリーの大筋を大体掴めていると判断できるが、「50%前後」と答えている2割強の学生など、希望者には今後スクリプトの配布も考慮すべきかも知れない。

### C- 2 興味度

内容に対する興味に関しては、「かなり持てた」と回答した学生が全体の半数を超え、「まあまあ持てた」を加えると87.7%となる。しかも3群間の差がほとんどなく、全レベルの学生が一樣に興味を持つ事が出来た教材と言えよう。

### C- 3 宿題

授業中にワークブックの答え合わせをすると、クラスによっては宿題部分がきちんと出来ていない学生も結構いるので、「かなりした」「大体した」を合わせた全体平均が78.0%というのは意外な数字である。この中には1, 2度テープを聞いただけでわからないと判断して、さっさとギブ・アップした学生の数字も含まれていると推測する。

### C- 4 後輩への推薦の可能性

ここでは“Living in Washington”が後輩達にも推薦できる教材か否かをその理由と共に尋ねたが、8割弱の学生が後輩にも推薦できる教材として評価し、その理由の筆頭に「興味が持てて、面白かった」ことを挙げており、学生が「米国の学生の生活」に興味を持っていることがわかる。また、このビデオでは学生自身でも「使えそう」な英語が豊富に使われていることも魅力のようである。字幕が無くてもストーリーが理解できたことで、「視聴後の達成感」も得られていることがわかる。

推薦できない理由としては「古い」事が挙げられているが、これは筆者の予想をはるかに下回る数字（5件）で、内容が学生の興味とレベル

に合った教材であれば、少々古い教材でも十分に使用できることが証明されたと言えよう。「エンディングが面白くない」という理由は否定的意見というより、それだけ学生がドラマの中で展開される交友関係などに興味を引かれていたと見ることもできよう。事実、ドラマの展開や登場人物像などが共通の話題として学生間で取り交わされ、ドラマの中に登場するカクテルを実際に試す者も出るほど、学生の関心を引いた教材ということで今後も授業で使って行きたい。但し、学生達が時代遅れの教材とみなして最初から拒絶反応を示さぬよう、今後も pre-listening なども含めた入念なサポート教材の準備は欠かせない。

#### D. LL 授業全体に関して

ここでは、LL 授業全体を通して、どのような教材が最も学生の学習意欲を駆りたて、かつ、英語力の向上をもたらしたか、今後、どのような教材を希望するか等、教材に関して、リスニング力養成には不可欠の授業時間外学習を要する宿題、及び、授業中に教師が用いる言語について尋ね、最後に、英語力の向上について学生の自己評価を求めた。

##### D-1, 2 リスニング力向上に役立った教材、面白く、やる気を起こさせた教材（集計結果—表 6, 7）

「リスニング力の向上」、「面白く、やる気を起こさせた教材」双方の筆頭に全群の学生（それぞれの項目で 102 名、115 名。「教材全てと回答した学生も含む」）がビデオ教材 Living in Washington を挙げている。この約 70 分のドラマは一回 4, 5 分づつ前期を通して、連続テレビ番組を見るかの如くストーリーを楽しみながら視聴し、ワークブックを用いて内容理解の補強もしてきたので、内容の適切さと同時に使用頻度と言う点からも馴染みがあり、このような結果が出たのであろう。Tel 関連の教材も「面白く」（20 名）、リスニング力の向上に貢献した（59 名）と評価されている。T/F クイズ等付きのテープ教材は、学生の興味を考慮して選択したつもりであったが、彼らにとってはあまり面白い物ばかりではなかったようである。しかし、65 名（「教材全てと回答した学生も含む」）の学生がリスニング力の向上に役立ったと答えており、教材として

の役割はある程度果たしていることがわかる。だがやはりビデオ教材に圧倒的な効果があったようである。小池（1993）も「ヒアリングの訓練において、耳だけによる、視覚経路を無視した訓練、例えば、LL 中での聴覚だけによるヒアリングでは、言語の表面的意味を理解する力はある程度伸びることは期待できても、実際に使用される言語の真の意味を理解して行く力をつけて行くためには不十分であると言わざるとえない。」（p.343）と述べている。また、映像教材は「理解しやすい」ことや、「興味がわく」だけではなく、「学習への積極的な参加」を促す（大八木、1997）上でも教育効果が大きいと言えよう。

#### D- 3 今後、取り上げて欲しい教材、トピック

現在既に多種多様な教材を使用しているせいか、この項目への回答は22 件のみであった。その中では映画・海外 TV ドラマが7 件と最も多く、やはり映像のある教材に人気がある。学生の5 割強が受験を希望している TOEIC、及び3 割強が希望している TOEFL 対策への要望が予想より少なかったのは、授業でしているリスニング教材が理解できればそれが TOEIC・TOEFL の勉強にも繋がると学生に伝えてあることが影響しているのかも知れない。

#### D- 4 宿題について

テープ教材で配布したワーク・シート及びビデオ教材用のワーク・ブックは、授業中には導入と解答だけを行い、主な部分は、テープ録音した教材を各自のペースでできるよう、宿題とすることが多かった。しかし、前期は就職試験による負担がかかる学生も多いことや、他教科の課題量との兼ね合いも懸念されることから、この項を設けた。

#### D- 4 a, 4 b 宿題の分量、内容

宿題の量、質共に8 割弱の学生が「適当」としている。特に上位群にとっては好評だったようであるが、下位群では、3 割強が内容については「どちらとも言えない」としている。今後は宿題をこなすことのメリットなどについてのペップ・トークをより頻繁に入れ、無関心派のような学生たちの「聴く量」を増やすような指導を心がける必要がある。



#### D- 5 教師が指示、説明に使う言語

LL 教室内に “Thinking in English” の環境を作るためには、むしろ英語のみの授業を行うのが良いのだが、伝えたい情報が学生に確実に届いているか不安になることがある。そこでここ数年は、ドリルで扱う文法の説明は日本語で、リスニングでの pre-listening は英語、解答後の補足的解説は code-switching の弊害を気にしながらも英語に日本語を交えるようにしているので、この問いで、学生の反応を確認した。

上位群の 14.0% は「英語のみ」が良いとしているが、全体では 9 割強が「併用」を望んでいるので、学生の理解度を確認しながら、現在行われているこの併用スタイルを当分、続けて行く。

#### D- 6 総合評価 —英語力の向上

ここでは、前期の LL の授業によって、英語力、特にリスニング力がどのくらい向上したかを自己判断してもらったが、全体の 42.0% が「かなり向上した」と答えた。「ある程度向上した」を含めると全体で 86.0%、上位、中位、下位の各群ではそれぞれ 92.0%、88.0%、78.0% がリスニング中心の英語力の向上があったとしている。「どちらとも言えない」とした学生は全体で 13.0% であるが、下位群では 20.0% となっている。「あまり向上しなかった」は下位群の 2.0%（1 名）のみで「全然向上しなかった」は 0% である。

この回答は各学生による主観的評価で、テストなどによる客観的評価ではないが、学生はこのアンケートを記入する際に、各自、前期に行った全 8 回の T/F クイズの結果、各種ワーク・シートも参考にしており、また、宮原ら（1997）が指摘するように、多くの場合、学生は自己の能力の判断においてかなり確かで、英語を聞いてわかるかどうかは、自分自身が一番良く知っていると言われるので、これらの自己評価の信頼性は高いと言えよう。

この授業が 8 割強の学生の英語力向上に効果的だったという評価を得たわけであるが、今後は、20.0% が「どちらとも言えない」と回答した下位群の学生の為に対策を講じる必要がある。

### 3. 資格試験等の受験状況、希望

本リサーチではこのセクションは参考のみとした。

### 4. 海外居住、留学等の経験

本リサーチではこのセクションはレベル分けの為に2年以上の海外居住歴の項目のみを参照とし、データの掲載はしていない。

### 5. 学生の意見、感想、提案

自由記述としたこのセクションでは「ビデオ教材その他色々な種類の教材を使えて良かった」、「教材が多過ぎて大変だった」等、他のセクションでの回答と重複するものが多かった。また、筆者が担当している1年次のLL授業（“Oral English”, 教材は一種類のみ）にも2年次のこの授業と同じように複数の教材や、ビデオも取り入れて欲しかったと言う意見がかなり多くあり、改善の必要性を強く感じた。他には「英語での面接試験がスムーズに出来た」、TOEICなど外部の試験で「リスニング力がついていてことを実感した」、「これからもリスニングの学習は怠らない」等、この授業を受けてのプラス面の記述もあった。

## V. おわりに

本稿では今後のCALL導入の可能性を視野に入れて、現在行われている2年次Communication SkillsのLL授業を総括すべく、学生へのアンケート調査を基に、授業の分析、考察を行った。現在、筆者が1人で全学のLL授業を担当し、週に延べ1,000余名の学生と接しているため、個々の学生の声に耳を傾ける余裕が残念ながらあまり無いことから、アンケートでは、通常の授業中には把握しきれない学生の状況、要望等をできるだけ知りたいと、質問事項は30以上に互ったが、大半の学生から詳細な回答を得ることが出来た。

その結果、ドリルに関してはペア学習も含め、授業方法に改善が必要であることが判明したが、そのほかのリスニングについては概ね良い評価を得、大半の学生もLL授業を通して、英語力がついたと感じているようである。ただ、英語力が高い学生の多くが、適切な難易度の授業内

容に満足し、学生自身も良く勉強をしているのに比べ、英語力がさほど高くない学生の中には、授業内容を消化し切れず、宿題、復習もあまりしていない者も見られる。これは教材の難易度が高過ぎて学習意欲を失わせた結果とも言えよう。いかに個々の学生のレベルに応じた指導方法、教材を選択し、提供するかが、今後の大きな課題である。LL 授業のようなスキル・アップのためのトレーニング的要素が極めて強いクラスにおいては、レベル別クラスの導入が、個々の学生により多くの利益をもたらすのでは、と今回のアンケート結果からその意を強くした。確かに、能力別クラスの導入には賛否両論ある上、実施にあたっては、プレイスメント・テスト、時間割編成、学生のモラル面の考慮等、懸案事項は多いが、本学においても一部の英語科目におけるレベル別クラスの導入を検討すべき時期なのかも知れない。或いは、CALL の導入により、教材ソースの input、タスクの難易度などを制御することが容易になれば、同一教室内での個々の学生のレベルに応じた対応もある程度可能にはなるであろう。

ともかく「聴くことを学べは他の技能への移転が起こることも観察されており」(竹蓋、1996)、「聴くことを主体にした学習の利点を教えられた学習者は、1人で学習を続けて行く傾向がある」(Gary, 1981; Koike, 1993) ので、学生達が卒業後も自主的に勉強を続けていくための基盤にもなる、学生の学習意欲を高めるような授業を今後も続けて行くことが肝要である。

## 参考文献

- Anderson, Ann and Lynch, Tony. *Listening*. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- Gary, J. O. and Gary, N. "Caution: Talking May Be Dangerous." *IRAL* 19,1, 1-14, 1981.
- Johnson, Keith, and Johnson, Helen, ed. *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics*. Blackwell, 1998.
- Nakamura, Hiroki. "The Effect of Two Different Kinds of Repetition Drills on Japanese EFL Learners' Listening Ability: The Careful Colloquial Style and the Rapid Colloquial Style with Sound Changes." *JACET Bulletin*, 31, 65-78, 2000.
- Nunan, David. *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.
- Stupak, Steven A. *The Prentice Hall Regents Practice TOEIC Test*. New Jersey: Prentice Hall Regents, 1995.
- Ur, Penny. *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- アンドラディ久美. "A Grading System for Listening Comprehension Materials" 『上智短期大学紀要』第16号、57-74, 1996.
- Johnson, K. and Morrow, K. 小笠原八重訳. *Communication in the Classroom*. 『コミュニカティブ・アプローチと英語教育』 桐原書店 1984.
- 小池生夫編. 「英語のヒアリングとその指導」大修館書店 1993.
- 小池生夫. 「大学外国語教育論」『慶応義塾大学日吉紀要 英語英文学』No. 28、29 (合併号) 1-21、1996.
- 宮原文夫、名木幹雄、山中秀三、村上隆太、木下正義、山本廣基. 『このままでよいか大学英語教育一中・韓・日3か国の大学生の英語学力と英語学習実態』(大学教育学会九州・沖縄支部プロジェクトチーム) 松柏社 1997.

大八木広人「LL が生きるとき（3）映像教材利用と指導上の工夫」『LL 通信』198号、14-17、1997.

佐野富士子「オーラル・アプローチ」『現代英語教授法総覧』59-69. 田崎清忠編. 大修館書店 1995.

杉本孝子「LL 中心のリスニング・スピーキング指導ーペア学習を使いこなす」『LL 通信』212号、10-13、2000.

竹蓋幸生『ヒアリングの行動科学』研究社 1984.

柳善和、「まだまだ役に立つカセットテープ・音声 CD 教材」『英語教育』10月号、1999.

### ドリル用テープ教材

Bruder, Mary Newton and Esarey, Gary. *MMC: Developing Communicative Competence in ESL*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press for the English Language Institute, 1985.

Cosgrave, Desmond, ed. *Modern English Cycle One Books 6-10*. Ashiya: Seido Foundation, 1985.

O'Neill, Robert and Niemczyk, Dorothy. *American Kernel Lessons: Advanced*. New York: Longman, 1983.

### リスニング用テープ教材

Blasky, A. *Faces: Exchanging Views in English*. Tokyo: Lingual House, 1985.

Brieger, Nick and Cornish, Anthony. *Secretarial Contacts*. Hertfordshire: Prentice Hall International, 1989.

Davis, B.G, Wook, L. and Wilson, R. *ABC's of Teaching with Excellence*, Teaching, Innovation and Evaluation Services, University of California, 1983.

Geddes, M. and Sturtridge, Gill. *Listening Links*. London: Heinemann Education Books, 1979.

Helgesen, Marc and Brown, Steven. *Active Listening--Expanding, Book 3*. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.

- James, Gary. *Interactive Listening on Campus*. Boston: Heinle & Heinle, 1992.
- Naterop, B. Jean and Revell, Rod. *Telephoning in English*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Nomura, Y. *Pinch and Ouch: English through Drama*. Tuscon, AZ: Lingual House, 1982.
- Otani, Tatsumi and Otani, Kayoko. *English for Excellent Secretaries*. Tokyo: Eikyo, 1986.
- Schmidt, Jennifer P. L. and Solorzano, Helen S. *North Star: Focus on Listening and Speaking, Intermediate*. New York: Longman, 1998.
- Roe, Peter and Cornish, Anthony. *English for International Co-operation*. London: BBC, 1987.
- Rost, Michael and Uruno, Munetusgu. *Strategies in Listening*. Harlow, England: Lingual House, 1990.
- Rost, Michael and Lance, John. *Pairallels: Narratives for Pair Work*. Tokyo: Lingual House, 1984.
- リスニング用ビデオ教材**
- Steele, Frank G. *Living in Washington*. Harlow, England: Longman Group, 1984.

資料 1 教材リスト - Listening Comprehension Practice

#	Title	Duration	Task	Style	Speaker			Script	Source
					Accent	Gender	Age		
1	Mind Your Manners	5'00"	T/F: MI	Dialogue	American	F/M	Y/M	A	Helgesen, et al., 1996
2	Plan the Meals	5'30"	T/F: MI, D	Drama	British	F/M	M	A	Geddes, 1979
3	Art	2'00"	Dictation	Dialogue	American	F/M	Y/M	N/A	Nomura, 1982
4	Understanding Accents	5'20"	T/F: MI	Dialogue	American	M/M	Y/M	A	Schmidt, et al., 1998
5	Sao Paulo Opening	7'00"	T/F: MI, D	Dialogue	American	F/M	Y/M/E	A	Rost, 1984
6	Checking Arrangements	5'10"	T/F: D	Dialogue	British, Non-native	F/M	M	A	Brieger, et al., 1989
7	First Impression	7'00"	T/F: MI	Interview	Am. Br. Can. Aust. Non-nat.	F/M	Y/M/E	A	Brasky, et al., 1985
8	Telephoning in English	3'10"	MCQ	Dialogue	British, Non-native	F/M	M	A	Naterop, et al., 1987
9	Telephone Calls (1)	4'00"	MCQ, FI	Dialogue	American, Non-native	F/M	Y/M	A	Rost, 1990
10	Telephone Calls (2)	4'30"	FI	Outgoing Messages	American	F/M	Y/M	A	Teacher-made original material
11	While You Were Out	5'00"	NT, D	Dialogue	American	F/M	Y/M	N/A	Teacher-made original material
12	Stress	6'30"	NT, D	Lecture	American	F/M	Y	A	James, 1990
13	Patient	1'30"	T/F: MI	Drama	British, Non-native	F/M	M	A	Roe, et al., 1997
14	TV CMs	1'30"	OEQ, FI	Narration	American	F	M	A	Recorded from U.S. TV (ABC,CBS), 3/2000

Task:T/F=True False Quiz MI=Main Idea D=Details MCQ=Multiple choice quiz OEQ=Open-ended questions NT=Note taking  
 FI=Fill-in-the-blanks Script:A=Available NA=Not available Age:Y=Young speaker M=Middle-age speaker E=Elderly speaker

表1 LL 授業構成

アクティビティ	教材・タスク	頻度	所用時間
文型口頭ドリル	毎回平均2つの基本文型をモニターで紹介した後、例文をテキストを見ずに口頭練習 前期は50文型、合計約500の例文練習	毎授業	5～10分
リスニング (テープ)	ダイアログ、ドラマ、インタビュー等テープ教材を基に、T/Fクイズ、ワークシートなどをする。(教材リストはAppendix参照)	原則として毎授業何れか1つ。	10～25分
リスニング (ビデオ)	ドラマ1本をワーク・ブックを用いての内容理解、Fill-in 問題等しながら視聴。	前期を通し15回に分けて視聴。	5～30分

表2 リスニング (テープ) ー特に興味を持てた教材とその理由  
(1位～5位)

順位	教材	主な理由
1	Telephoning 関連教材	実用的で、将来役に立ちそう 実際にメモ取りなどをして面白かった 本物の Tel メッセージなどが聴けた
2	TV CMs	内容が面白い 生活文化もわかる 海外で実際に見られているものだから 通常では見る機会がないから
3	First Impression	いろいろな国の英語が聞けた ネイティブの英語以外にも興味がある
4	Understanding Accents	アクセントなど英語に関する知識を英語で学べた 長さがちょうど良い
5	Plan the Meals	日常会話を使ったドラマだった ストーリーがわかり易かった

表3 リスニング (テープ) ー特に興味が持てなかった教材とその理由 (1位～5位)

順位	教材	主な理由
1	Stress	講義形式で難しかった 全く理解できなかった
2	Patient	単語 (専門用語) が難しかった 長過ぎて集中力を保てなかった
3	First Impression	訛りのある英語だったから
4	Sao Paulo Opening	ビジネス会話なのにその雰囲気なかった
5	Art	簡単過ぎた



表4 リスニング（テープ）—特に難しかった教材とその理由  
（1位～3位）

順位	教材（難易度）	主な理由
1	Patient (#13)	話す速度が速い British English だから 病気のことなど背景知識がなかった 単語が難解 登場人物が多い
2	Stress (#12)	話す速度が速くて細部が聞き取れない 単語が難解 長過ぎる 講義の内容が難し過ぎる
3	Understanding Accents (#4)	T/F クイズの問題がわかりにくかった 長い

表5 リスニング（テープ）—特に簡単だった教材とその理由

順位	教材	主な理由
1	Art (#3)	同じ内容の英語を2つの異なった場面で聞いた 話す速度がゆっくりだった Dictation が易しかった
2	First Impression (#7)	短く区切りながら聞いたので
3	Plan the Meal (#2)	場面設定がはっきりしていた 会話している場のイメージが浮かんだから 内容が現実的でわかり易かった

表6 リスニング力をつけるのに役立った教材（1位～5位） 実数

順位	教材	上位群	中位群	下位群	合計
1	Living in Washington（ビデオ）	21	24	30	75
2	T/F クイズなどをした教材全般（テープ）	11	19	18	38
3	Tel 関連の教材（ワークシート、メモ取り）	6	13	13	32
4	教材全て（テープ、ビデオ）	13	8	6	27
5	ドリル（口頭文型練習）	0	5	3	8

表7 面白くやる気を起こさせた教材（1位～5位）

実数

順位	教材	上位群	中位群	下位群	合計
1	Living in Washington（ビデオ）	36	33	37	107
2	Tel 関連の教材（ワークシート、メモ取り）	8	5	7	20
3	TV CMs	4	4	4	16
4	教材全て（テープ、ビデオ）	6	1	1	8
5	T/F クイズなどをした教材全般（テープ）	1	1	4	6

資料2 授業についてのアンケート -- Communication Skills (LL)

クラス \_\_\_\_\_ 学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

I. レッスン全体の構成

LLクラスは毎回原則として初めに文型ドリル練習、次にリスニング、ビデオという構成になっていましたが順番、分量配分など、どうでしたか？(チェック・マークをつけて下さい)

とても満足 満足 どちらとも言えない やや不満足 不満足  
良かった点/改善すべき点：

II. 教材

A Drills に関して

1. 各文型の説明は十分でかつ理解しやすかったですか？

大変理解し易い 理解し易い どちらとも言えない ややしにくい しにくい  
改善すべき点：

2. 文型の最初の提示法は次のどれが最も効果的でしたか？

モニターのみ Drill Book のみ モニター・Drill Book 併用 テープのみ  
その他の方法の提案：

3. 一回のレッスンでする分量は適当でしたか？

適当 多過ぎる 少な過ぎる

4. LL時間内での練習時間は十分でしたか？

適当 多過ぎる 少な過ぎる

5. ランダム・ペアを組んでの練習はどうでしたか？

大変良かった 良かった どちらとも あまり 全然良くなかった  
改善すべき点：

6. 授業時間以外にも練習しましたか？

かなりした ある程度はした 少しはした あまりしなかった 全然

7. クラスでのドリル学習とのコーディネーション

現在のように先にLLで練習する方法が良い  
クラスで先にしてからLLで練習した方が良い  
その他の提案：

8. 文型ドリルによって各種の構文を身につけることができましたか？

かなりできた ある程度はできた どちらとも言えない あまり 全然

9. ドリル練習を通して fluency が増しましたか？

かなり増した ある程度は増した どちらとも言えない あまり 全然

10. 学習した文型を Com. Skills 以外の他の授業の場でも使っていますか？  
 かなり使っている ある程度は 少しだけ あまり使っていない 全然

11. 学習した文型を今後実際に使えそうですか？  
 かなり使えそう ある程度は どちらとも あまり使えそうもない 全然

**B リスニング（テープ）教材に関して**

1. 教材に興味を持ってましたか？
  - a. 特に興味を持てた教材（W/理由）:
  - b. 特に興味を持てなかった教材（W/理由）:
2. 特に難しかった教材、簡単だった教材は何ですか？
  - a. 難しかった（W/理由）:
  - b. 簡単だった（W/理由）:
3. 内容理解に効果的だったタスクは何ですか？（チェック・マーク - 複数可）  
 ( ) T/Fクイズ - 口頭出題 ( ) T/Fクイズ - 選択肢の記述有り ( ) 3択クイズ  
 ( ) Fill-in-the-blanks ( ) Dictation ( ) Note-taking
4. 聞き取れなかった箇所は後でスクリプトでチェックしましたか？  
 常に 大体 時々 たまに したことは無い
5. 自宅/Self-study Hour でもテープを用いて復習していますか？  
 常に 大体 時々 たまに したことは無い
6. 前期に使用した下記全リスニング教材について該当箇所をチェックしてください

	Title	理解度（5易⇔1難）					興味度（5有⇔無）				
		5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
1	Mind Your Manners										
2	Plan the Meals										
3	Understanding Accents										
4	Sao Paulo Opening										
5	Checking Arrangements										
6	First Impression										
7	Telephoning in English										
8	Patient										
9	Art (Dictation)										
10	Tel - Worksheet (Pre)										
11	Tel - Worksheet (1)										
12	Stress										
13	TV CMs										

**C. Living in Washington（ビデオ）について**

1. 毎回の内容の理解度は平均してどのくらいでしたか？  
 90%以上 70%前後 50%前後 30%前後 10%以下

2. 内容に興味を持っていましたか？

かなり持てた まあまあ持てた どちらとも言えない あまり 全然

3. 宿題の Exercise はきちんとしていましたか？

かなりした 大体した どちらとも言えない あまり 全然

4. 後輩達にも使って欲しい教材ですか？

はい どちらとも言えない いいえ

理由：

### Ⅲ. LL 授業全体に関して

A. あなたの英語力向上に特に役だったと思われる教材は何ですか？（複数回答可）

B. 面白く、やる気を起こさせた教材は何ですか？

C. 取り上げて欲しい教材、トピックはありますか？

D. 宿題について（LL の授業中に出されたもの全般に関して）

a. 量： 適当 多すぎた 少なすぎた

b. 内容： 適当 まあまあ 不適當（具体的に）

E. 教師は授業中、日英両語（主に Drill 説明・日/Pre-listening・英）を用いました  
が、どの方法が良いですか？

英語だけ 場合よっての英日使い分け 日本語だけ

F. 前期の LL の授業によってあなたの英語力（特にリスニング力）は向上したと思  
いますか？

かなり向上した ある程度向上 どちらとも言えない あまり 全然

### Ⅳ. 資格試験等の受験歴について

受験したことがある： TOEIC TOEFL 英検 1 級 英検準 1 級 英検 2 級 他

今後受験したい： TOEIC TOEFL 英検 1 級 英検準 1 級 英検 2 級 他

### Ⅴ. 海外居住、留学等の経験について

居住・留学： 無 2 年以上（国名 / 才～ 才）

約 1 年（ 才） 約 1 ヶ月（ 才）

ホーム・ステイ： 無 有（国名 / 期間）

将来の希望：長期留学（1 年以上）短期留学（数ヶ月）その他、Working Holiday  
の利用、等

### Ⅵ. その他、意見、感想、提案など自由に書いてください。

注：本稿ではスペースの都合上、アンケートの選択肢部分を一部簡略化してある。